女貞

〔古事記傳二十七〕和名抄に、黃芩、和名比々良木、楊氏漢語抄云、杠谷樹、一名巴戟天、和名上同と見え、(黃芩を當たるは心得ず、)字鏡に、巴戟天、比々良木、杠谷樹上同とあり、(或人云、比々良木は、漢名枸骨と云物なり、一名を剛穀と云、此字音を取て、杠谷とは云にやと云り、)

〔續日本紀二文武〕大寶二年正月丙子、造宮職獻㆓杠谷樹長八尋㆒、(俗曰比比良木)四月丁未、從七位下秦忌寸廣庭獻㆓杠谷樹八尋桙根㆒、遣㆓使者㆒奉㆓于伊勢大神宮㆒、

〔夫木和歌抄二十九ひいら木〕ひいら木　民部卿爲家
世中は數ならずともひいら木の色にいでゝはいはじとぞ思ふ

〔延喜式十三大舍人〕凡正月上卯日供㆓進御杖㆒、(中略)頭進奏曰、大舍人寮申正月(能)上卯日(能)御杖仕奉(氏)進(良牟止)申給(波久登)申、勅曰置之、屬以上共稱唯、隨㆑次相轉置㆓案上㆒、舉即退出、其杖曾波木二束、比。比。良。木。棗毛保許桃梅各六束、(已上二株爲束)燒椿十六束、皮椿四束、黑木八束、(已上四株爲束)中宮比。比。良。木。棗毛保許桃梅各二束、燒椿各五束、(但奉儀見㆓東宮式㆒)

〔紀伊續風土記物產六上〕枸骨(本草、續日本紀比々良木、俗にヒラキ、即雄ヒラキ、)雌比良木(メヒラキ)(葉の邊尖刺なきものをいふ)雄比良木(ヲヒラキ)(牟婁郡にてウシホツカウといふ、前條の雌ヒラギと同名にして、枸骨の屬にあらず、葉細長にして薄く邊に刺多し、然れども枸骨葉より軟なり、)右三種、各郡山中に多し、

〔歲時故實大概十二月〕一節分(立春の前日なり)の今宵門戸に鰯のかしらと柊の枝を插て、邪氣を防ぐの表事とし、(中略)往古は鰯のかしらにも限らずと見えて、貫之が土佐日記に、小家の門の端出繩、鯔のかしら柊などゝ有、但シ柊さす事は、いかなる據にや考へ得ず、

○按ズルニ、節分ノ時、黃芩ノ枝ヲ門戸ニ插ス事ハ、歲時部節分篇ニ詳ナリ、參看スベシ、

〔新撰字鏡女〕女貞實(比。女。豆。波。木、又造木、)

〔本草和名十二木〕女貞、一名冬生、(出㆓釋藥㆒)一名索盧、(出㆓太清經㆒)一名山節、一名青員、(已上出㆓兼名苑㆒)和名美。也。都。古。歧。一名多。都。乃。歧。